

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 8 日現在

機関番号：33941

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593480

研究課題名(和文)「安心」の尺度開発に関する研究

研究課題名(英文)Development of the An-shin Scale to the Japanese construct of reassurance.

研究代表者

岩瀬 貴子 (Iwase, Takako)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：80405539

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、安心の概念と、その概念の構造を明らかにし、安心の尺度を開発することである。回収された質問紙数は、一般社会人421部、大学生530部であった。分析の結果、安心尺度は、8因子で構成され、安心尺度因子得点と、併存妥当性用1尺度、予測関連妥当性用2尺度の3尺度間には、有意な正の相関があり、安心尺度の妥当性は得られた。安心尺度は、性別や、社会人と大学生、同居者の有無に関係なく評価が可能であったため、幅広い年齢層にも対応が可能であることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to examine the concept of reassurance and develop a scale by which reassurance can be measured. Recovery rates and valid response rates for adult subjects were 421 respectively, while those for college students were 530 respectively. As a result of the An-shin Scale was comprised of 8 factors. A significant and positive correlation was identified between the validity of the An-shin Scale and 3 measures of standard related validity as measured by the An-shin Scale factor score. Since the An-shin Scale was validated regardless of sex, adult age, and the presence of a housemate, it may apply to a wide age range of individuals.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域老年看護学

キーワード：安心 精神看護学 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

精神看護学の多くの教科書や看護の基本的な患者へのかかわりの姿勢を述べている書籍には、患者が安心を得ることができるように関わることは、看護の基本であるなどとよく記載されているが、その安心を定義し具体的にどのように介入するかはあいまいである。安心という概念は看護にとってはとても当たり前のことばとして、理解されているのではないかと考えた。

安心は、本来、乳幼児期に母親とのあいだでの相互関係により生じ得られる安心基盤が基になっており、乳幼児にとって、重要他者である母親とのあいだで獲得できた安心基盤は、その人の生きていく上での基盤となるものであると言及されている (Bowlby, 1993)。安心は、その人の状態 (対自分・対他者的) であり (豊廣・渡辺, 2007)、その状態は感情とも関係が深く (中村功, 2004)、安心できる能力が、人が生きていく上でのすべとなる (山岸, 2008) とも述べられている。また安心は人と人との間の相互作用のプロセスでもある (Speckens et al., 2000) ため、ライフイベントに対し、どのように感情を伴いながら思考し、安心を獲得するまで、その人がどのような相互作用を行っているのかは、その人自身の安心できる能力のレンジによると考える。

また、安心の概念には、知識として知ることができることや、自分でなにかを確認できることなど、教育に関することを内包している。慢性疾患の患者には、特に患者教育を行うことが多く、その教育の評価としても安心を用いることができると考える。また本尺度は、より良い医療の提供を評価できるよう様々な介入のアウトカムとしても利用可能であると考え。このより良いという考えは、QOL の概念に近いが、質の良い医療や生活に関わるサービスを得ることは、QOL よりも感情、状態的に満足できるという評価が安心の概念では説明ができるのではないかと考え、医療において幅広い利用が可能であると考えた。

本研究は、精神保健領域において利用できる精神的健康の指標のひとつとして「安心」に着目し、そのツールを開発することを目的としている。

近年、精神の健康を評価するツールは不安や苦痛などネガティブな面を中心に評価するものが多く、ポジティブな面に焦点を当てたツールはまだ少ない。安心の概念には、知識として知ることができることや、自分でなにかを確認できることなど、主体的に行動し得られたことが結果として安心の状態に至ると考えた。慢性疾患の患者には、特に認知行動療法、家族心理教育、服薬教育など教育を行うことが多く、その教育の評価としても安心の尺度は使用できると考える。また、医療の現場に限らず、大学教育においても、学生の安心に対する意図的な学習の強化も可

能となり、学生の自己成長への促進にも貢献できると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、安心の概念と、その概念の構造を明らかにし、安心 Scale を開発することである。

人間のひとつの状態である安心できる状態について把握できる安心尺度を開発する。

安心できる能力を客観的に把握できる安心尺度を開発する。

アウトカム指標として活用できる安心 Scale を開発する。安心の概念分析、安心尺度の開発、内的整合性の検討、構成概念妥当性の検討、基準関連妥当性の検討を行い、3年で達成する。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン: 本研究は、相関関係的研究デザインである。

2) 安心の構成概念の明確化: Rodgers (Rodgers, 2000) の概念分析方法を用いて英文献、和文献の「安心」の概念分析を行い、先行要件、属性、帰結を明らかにし、「安心」の定義を明確にした (岩瀬・野嶋, 2013)。「安心」の概念分析の結果により明らかとなった、「安心」の属性を、概念のサブスケールとした質問紙を作成した。手順としては、質問項目作成の参考資料を検討した。回答の選択肢と得点化を検討した。初段階での尺度作成を概念分析の結果で得られた属性を基に、作成を行った。

3) 回答の選択肢と得点化: 「安心」Scale は、対象者の主観的な評価であり、安心の状態の程度を評価する。評価しやすいように、リッカート評価を用いるが、「どちらでもない」の項目は評価を迷った際にチェックをする可能性が高いため削除する。しかし、答えにくい項目がある場合、欠損値になる可能性も高いが、今回は結果の検討に簡便な5段階のリッカート評価を用いた。評価の段階は、「非常にそう思う」(5点)「かなりそう思う」(4点)「まあまあそうである」(3点)「あまりそう思わない」(2点)「まったくそう思わない」(1点)とし、得点が高いほど安心が高いことを示す。

4) 初期段階での尺度作成: 2) ~ 3) で作成した質問項目の内容妥当性・表面妥当性の検討を行い、その結果により質問項目を検討した。これらは、日本赤十字豊田看護大学看護研究倫理審査の承認を得て行った。

5) 予備調査の信頼性の検討: 予備調査を実施し、予備調査結果の項目分析を行い、質問項目の洗練化を行った。

6) 本調査 (大学生・社会人) の実施: 郵送による無記名自記式質問紙法により調査を行い結果を分析した。また、内的整合性の検討、構成概念妥当性の検討、基準関連妥当性の検討を行った。調査対象は、一般社会人; 日本全国の都道府県の健康診断センター

の中からランダムサンプリングによって抽出した健康診断センターのうち、施設長からの調査協力に対する承諾が得られた健康診断センターに来院している一般社会人約1,000人程度。大学生：日本の大学で、大学や学部の責任者により調査協力に承諾が得られた大学に所属する大学生約1,500人程度。本調査は、高知県立大学看護研究倫理審査を受けて実施した。

概念の操作的定義として、本研究では、「安心とは、環境との相互作用により、その人がおだやかさや、不安苦痛が少ないと感じる状態であり、他者や社会との間で関係性やつながりを認識し、自分で自分を安心できる能力を持ち、自分自身を肯定し、信じ、楽観的な志向で物事を考えられること」と定義する。

4. 研究成果

回収された質問紙は、一般社会人426部(回収率43%)有効回答421部(有効回答率99%)、大学生530部(回収率42%)有効回答527名(有効回答率99%)であった。

一般社会人は、421名、男性176名、女性245名であった。平均年齢(標準偏差以下SD)は、男性56.44歳(11.9)、女性51.48歳(12.1)であった。年代別では、23-30歳は12名、31歳から40歳は55名、41歳から50歳は108名、51歳から60歳は108名、61歳から70歳は114名、70歳以上30名と、41歳から70歳までが、約8割を占めていた。

大学生は、527名、男性70名、女性457名であった。平均年齢(SD)は、男性20.37歳(2.5)、女性20.24歳(3.1)であった。年齢別では、18歳は100名、19歳は101名、20歳は126名、21歳は113名、22歳は65名、23歳以上は22名であった。

分析の結果、安心Scaleは、94項目8因子構造であり、因子名は、「おだやかである」「不安・苦痛が少ない」「楽観的志向である」「自分を肯定している」「自分に自信がある」「自分で安心できる能力がある」「対人関係の確かさがある」「社会とつながっている」と命名した。また、安心Scale因子得点と、併存妥当性用1尺度(主観的幸福感尺度)、予測関連妥当性用2尺度(家族サポート尺度、精神的回復力尺度)の3尺度間には、有意な正の相関があり、安心Scaleの妥当性は得られた。安心Scaleは、性別や、社会人と大学生、同居者の有無に関係なく評価が可能であったため、幅広い年齢層にも対応が可能である。社会人の安心認識は、将来に対する見通しの明るさであり、家族との関係が良く、自分の人生を前向きに受け入れ、何かあっても解決できる自分の力を信じていることであった。大学生の安心認識は、ストレスなどで動揺しても自分を落ち着かせることができ、粘り強く様々なことに興味を持って取り組むことができ、自分の将来に希望を持ち、困ったときには支えになる家族がいることであった。

本調査の結果から、安心の状態を表す属性

として【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】を、またその人の特性として、【楽観的志向である】【自分を肯定している】、能力としては【自分に自信がある】【自分で安心できる能力がある】、対象との相互作用としては【対人関係に確かさがある】、社会への帰属感として【社会とつながっている】という属性が抽出された。安心は“状態”を示す概念だけでなく、その人の“能力”そして“社会との関係のなかで獲得・育成”されるという広い視野を含めた概念であることが提案できた。また、安心は日頃自明的にその人が感じているいわば潜在しているものであり、なにかの出来事があると、人は意識的に安心をするための方略が生かされるのである。したがって、安心は、日頃は潜在的になる能力であり、危機的な状況下で顕在化し、いかに発揮されるかが重要になるということが考えられた。そして、社会への帰属感が、孤独感や不安の軽減につながり、安心へとつながっているのではないかと考えた。災害など様々な事象に対し、人は、他人事ではなく、社会に属する一個人として、事象からの学びを積極的に行うことがひいては社会に貢献できる一助となると考えた。

また、安心は能動的な思考や行動であり、その人が発達過程で獲得した安心できる能力や、自己受容が必要であり、対人関係や社会とのつながりのなかで得た感覚が必要となることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

・ 岩瀬貴子, 野嶋佐由美 (2013); 安心の概念分析, 高知女子大学看護学会誌, 39(1), 2-16.

〔学会発表〕(計2件)

・ Iwase Takako, Nojima Sayumi (2013); Concept Analysis of Anshin (Reassurance in Japanese), The 16th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) 21-22 February 2013, in Bangkok, Thailand.

・ Iwase Takako, Nojima Sayumi (2014); Development of the An-shin Scale to measure the Japanese construct of reassurance, The 17th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) 20-21 February 2014, in Manila, Philippines.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩瀬貴子（43）

研究者番号：80405539

(2) 研究分担者

野嶋佐由美（63）

研究者番号：00172792

(3) 連携研究者 なし

（ ）

研究者番号：